

みのおのおいたち その20

豊川地区(二)

豊川地区といえは応頂山勝尾寺があります。其面地区の滝安寺と並んで北摂地方さつての有名な古寺である同寺には、千百年通もの中世の文書が保存されています。豊川地区はもとより其面の歴史を考ふるうえで貴重な史料であり、府下でも屈指の文化遺産であるため、府の文化財に指定されています。

地区の歴史と深くかかわってきた勝尾寺の由来は、鎌倉時代の寛元元年(一二四三)に書かれた「応頂山勝尾寺古流記」一巻で知ることができます。

一方、同寺の名は「三代実録」の元慶四年(八八〇)三月一九日の条の清和太上天皇の太和・摂津国内の「名山仏堂」巡幸の記事で一足早く登場します。また、そのときの摂津の名山が「勝尾



山(寺)であったことが同書の同年一月四日の記事でわかります。平安時代初期の勝尾寺がすでに都でも有名であったことがうかがえます。

ところが、古流記などの伝える清和帝と勝尾寺の関係としては、六代座主の行巡上人が清和帝の病氣治癒に効験を示したことから勝尾寺の寺号を賜ったと語られており、天皇の参詣はそのお礼であったとも記されています。まず、古流記の中での行巡上人の伝えを紹介してみましよう。「天皇の病氣平癒のため物使が来山して上洛を命じたが、時に行巡は特別の修行中であつたから物命をこぼしました。そこで物使は普天の下みな王土なり、どうして朝威を軽んじ、自分の宿願を果たそうとするか、と責めました。そこで行巡は杖を地に立て、その上に草座を敷いてすわり、自分は王土に坐していないと答えました。さらに物使が杖の立つ所は王土であろうと追求すると、たちまち行巡は空中に一大余り飛昇して、そのま

上人ゆかりの一端を述べたこの話は、日本の社会全体が古代から中世へと大きく転換し始めたこの時期の、勝尾寺や其面の歴史を考ふるうえで大変興味深いことを物語っています。

その一つとしてあげられるのは、勝尾寺という地方の山間寺院の修行者の思想が、古代律令国家を支えていた根本的な原理の「王土・王氏思想」を否定していることです。つまり、行巡上人が物命をこぼし、空中へ飛昇することで王土の拘束から離れたことは、もはや王土・王氏の思想が第一義ではなくなっていたことを示しているのです。従って、この勝尾寺と日常的にも深くかかわっていたと考えられる豊川地区や其面地区の人々にも、この考えが波及し浸透していったと十分に考えられます。つまり、この地方での「古代社会」に幕が降るされ、中世という新時代が到来したのでしよう。

勝尾寺古流記が伝える行巡上人の話は、一面では当地方の歴史の反映であったと言うことができます。